

GROSSES DEUTSCH- JAPANISCHES WÖRTERBUCH

独和大辞典

編輯委員

国松 孝二	東京大学名誉教授
岩崎英二郎	慶応義塾大学教授
橋本 郁雄	学習院大学教授
濱川 祥枝	成城大学教授
小野寺和夫	東京大学教授
原田 武雄	南山大学教授
千石 喬	東京大学教授
中島 悠爾	東京都立大学教授
平尾 浩三	東京大学助教授
三城 満禧	東京大学助教授
楢原 良行	電気通信大学教授
新田 春夫	東京大学助教授

Verlag

SHOGAKUKAN

TOKYO

小学館 独和大辞典 定価20000円

昭和60年1月18日 初版1刷発行

編者代表 国 松 孝 二
発行者 相 賀 徹 夫

発行所 〔郵便番号 101〕
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
株式会社 小学館
電話 編集 東京 03-291-7611
業務 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5745
振替 東京 8-200番

印刷所 共同印刷株式会社
製本所 株式会社 若林製本工場

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

造本には、しゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、お取り替えいたします。

ISBN4-09-515001-7 C0584 ¥20000E

緒 言

本辞典を編纂するにあたって、私たちが最初に思い定めた目標は、なによりもまず、現代ドイツ人の生の言語生活をできるかぎり直接に反映した、その意味でもっとも今日のアップデートな独和辞典を作りたいということであった。新しい独和辞典は、政治・経済・科学・思想・芸術・技術・産業などの諸分野にわたって、日本人がとりわけ現代ドイツと取り組むための有効なメディアとなるべきであり、この重要な役目を果たするためには、そこに直結する現代ドイツ語、カレント・ジャーマンにこそひととき強く照明をあてるべきであると、そう私たちは考えたからである。ただ、独和辞典は、英和辞典や仏和辞典なども同じことだが、それが大辞典であればあるほど、現代語重視へ一方的に傾斜しきるわけにはいかないという事情をかかえている。小辞典ならばそうした偏向も許されるであろうが、大辞典であるからには、同時に、例えば100年前、150年前、200年前の文学や文献・資料を閲読し研究する人たちのためにも、その用を便じなければならないのである。すべて独和大辞典は一種の宿命のごとく、この厄介な重荷を負わされているわけだが、しかし、これは一見するほど扱いにくいものではない。ドイツ語には近世以後、少なくとも18世紀にドイツの標準語がほぼ確立して以来というのは、文法面においてはもとより、語彙・語形・語義・語法の点でも、もはやそれほど深い断層は見られないからである。日本語が、江戸時代の日本語はおろか、すでに明治時代の日本語が、現代の多くの日本人にとって、とりわけ若い世代にとって、これを読解するのにかなりの注釈を必要とするのとは、いささか事情を異にする。無論、それにしても言語推移が全然なかったわけではない。やはり、多かれ少なかれ新陳代謝が進行し、いわば定年を迎えて老衰してゆく語彙・語形・語義・語法が生ぜずにはいなかった。私たちは一方ではこれらを、ときには《古》(本辞典ではこれを⁷で示す)として、ときには《雅》として、極力救い上げることに努めたのである。つまり、現代ドイツ語をその最新の状態においてとらえた、極めて鮮度の高い独和辞典、しかも同時に、近代ドイツ語の全容を視界のなかに収め入れた、パースペクティヴの相当深い独和辞典、そういう独和辞典を作ることが私たちの目差す目標であり、私たちを律する基本方針であったのである。

このことが、まづ辞典の見出し語の選定に私たちが着手したときにも大前提となった。およそ辞典編纂は見出し語の選定からはじまるものであり、また始まらなければならないものであるから、私たちがドイツ内外の最新刊のドイツ語辞典数種をひとまず資料として、見出し語の選定から出発したのは当然であるが、その際選定の規準になったのが、上述したような私たちの基本方針であった。私たちは一方では広く近代ドイツ語の全域を視野のなかにとらえて、そこから見出し語を選定しつつも、生動する現代ドイツ語に強く焦点をしばって、そこから見出し語を選定することに力を注いだのである。それにしても、現代ドイツないしドイツ語圏のアクチュアルな言語生活の先端に絶えず密着して見出し語の選定を進めることは、いつ終わとも知れぬ作業であって、私たちににとってはまさにタタロスの苦しみに似ていた。時あたかも、政治・経済・軍事上の東西の対立、それに伴う西独におけるアメリカ英語の、東独におけるロシア語の氾濫、科学・技術の目を見張る革新とそれにもとづくいわゆる新産業革命、そしてこれに連動する社会生活の急激な変貌、これらが言語生活の上に濃い影を落として、新しい語彙、新しい略語、そして新しい短縮語が続々と誕生し、加うるに既存の語彙に新語義が発生してやまなかったからである。この趨勢は今もなおやまず、恐らくドイツ語の歴史の上で未曾有の現象であるといっても過言ではなからう。私たちは二十年に及ぶ原稿執筆の期間中ではもとより、最後の校正に従事しているあいだも、常にこれらを追い求めて、適当と思われるものをスペースの許すかぎり採録することに腐心した。これによって本独和大辞典は、手前味噌をならべようだが、例えばドイツの古典をひもとく人びとの要望に能く応え得る独和辞典でありながらも、同時に、例えば現下のドイツの文物にふれようとする人びとの使用に堪え得る斬新な独和辞典ともなりえたかと思うのである。座右におき、機に臨んで検索されるならば、これが我田引水を狙う徒らな浮誇の言でないことを、恐らく納得されるに相違ない。なお、私たちは大小の分級点を使用して、見出し語の分級個所をくまなく表示するとともに、独自の新しい符号を用いて、見出し語のアクセントの所在と母音の長短を明示するようにしたが、このことも是非言いそえておきたい。語を分級しようとするときに抱く疑念も、これによって氷解するだろうし、ドイツ語に多少親しんだ人ならば、これだけで見出し語をほぼ正確に発音することができ

るだろう。

さて、見出し語という全体の枠組のなかで、すべての辞典は、それが独独辞典や英英辞典のような一か国語辞典であると、独英辞典や英独辞典のような二か国語辞典であることを問わず、何はさておき語義辞典たろうと欲する。語義辞典たることこそ、あらゆる国の国語辞典のもっとも基本的な、そしてもっとも強い願望であろう。事実、語義辞典たることに終始する国語辞典は、わが国だけでなく、海外にも数少なくないのである。むしろ、それが辞典編纂の通例のあり方だといつてよい。勿論、私たちの独和辞典もまた優れて語義辞典たることをもって、みずからの主たる念願としたのであり、私たちはその実現のために別して最深の配慮と最大の努力を払ったのである。尤も、語義を記述するには、通時的・歴史的方法と共時的・論理的方法との二種類の方法がある。ひとつの語が己の持つ源義から、どのような歴史的過程を辿って、いくつかの語義を派生発展させてきたかを記述し、それにもとづいてその語の語義を分類し配列するのが、通時的・歴史的方法である。私たちがこれを Grimm, Heyne, Paul, Trübner などの独独辞典にゆだねて、共時的・論理的な記述方法を採用したのは、私たちがドイツ語の現状に大きな比重をかけていることからしても、今さら断るまでもあるまい。私たちは見出し語の持ついくつかの語義を共時的に分類して、それらを現在の時点におけるそれらの使用頻度の高低に従って配列したのである。そしてさらに、可能なかぎり、各語義のあいだに論理的な、ときに心理的な脈絡を探って、語義全体の構造連関を暗示し、これによって語義の記述が単に語義の機械的な羅列に終わることのないように努めたのである。しかし、それにしても、それ自身孤立した語の語義は、言うならば一種の抽象体にすぎない。語は他の語と結合関係にはいったとき、つまり、なんらかのコンテクストのなかに位置を占めたとき、初めて具体的に特定の語義に向かって収斂し結晶してゆくのである。しかも、この結合関係、このコンテクストは、ある程度「詩人の自由」が許容されるにしても、当該国語の言語習慣として、つまり語法として、ほぼ社会的に確立し定着しているのである。従って、句例や文例などの具体的な用例によって、こうした言語習慣としての語法を提示することが、語義辞典の第二の、むしろより重要な、そして不可欠な責務であろう。「国語の乱れ」も、語義辞典としての辞典がこの責務をなおざりにして、単なる語義辞典にとどまるどころに胚胎する。語義辞典は語法辞典に脱皮することによって、初めて自己を完成するのである。本独和大辞典が語義辞典としてとりわけ力を傾注したのはこの点であって、私たちの当初の予想を遥かに上回る大冊の辞典となったのも、ここに起因するところが大である。もしも本辞典が、多方面にわたる、これまでにない豊富な用例を収載することによって、単純な語義辞典から、私たちの念願とする語法辞典にまで昇華しえた語義辞典へ、一步でも二歩でも近づくことができたとしたら、私たちの喜びこれに過ぎるものはない。なお、これは語義・語法だけでなく語彙・語形にも関係することだが、広義のいわゆる位相差に私たちが絶えず注意を払ったことを、ここで強調しておきたい。広義の位相差とは、例えばこの語義は《俗》であるとか《古》(本辞典ではこれを⁹で示す)であるとか、この語法は《雅》であるとか《スイス》であるとか、といったようなたぐいである。文体・修辞・社会層・職業・時代・地域・国別などに由来する、こうした語義・語法の、さらに語彙・語形の位相差は、ドイツ語を外国語とする日本人にとって特に判別しにくいものである。しかし、それだけに重要であると考えたので、私たちは文献を渉猟して得た知見をもとにして、控えめにではあるが、記号を用いてその旨を指示するようにした。大過なきを念じたい。

ところで、ドイツ語は言語学でいう屈折語のひとつである。しかも、未だに屈折語の性格を濃くとどめており、同じく屈折語でありながらも単純化の著しく進んだ英語などにくらべると、語形変化がかなり煩雑である。少なくとも、屈折語に慣れない日本人にとっては、それが実感であろう。従って、独和辞典は一樣に、まず語義辞典たるとともに、まず語形辞典あるいは変化形辞典たろうと欲する。実をいえば、この両面を充足することが、独和辞典編纂の基本的条件である。ところが、日本人のドイツ語学習者が、独独辞典は無論のこと、独和辞典をひいても、例えば Bäume から Baum を、(dunkle, dunkler, dunkles などの) dunkl.. から dunkel を尋ねあぐねるのが偽らざる実状であろう。このことに鑑みて、本独和大辞典は名詞・代名詞・形容詞などから動詞・助動詞に至るまでの目ばしい変化形を網羅して、これらをすべて見出し語として載録したので、優にひとつの独立した詳しい語形辞典の役目を果たすことができるだろう。そもそも私たちが思い描いたのは、ドイツ語に練達の人びとの常時の使用に堪える本格的な独和辞典でありながら、なおかつ他方では、ドイツ語に初心の人びとが学習時に参照して便利な独和辞典、そういう耐用度の高く広い独和辞典を編纂することであった。そのため

に私たちはさまざまな工夫をこらし処置を講じたが、独和辞典に語形辞典の性格を多分に持たせるようにしたことは、そのひとつの顕著な現われである。大辞典ではあるが、初学の人びとも机上に備えて随時参照すれば、思いもかけぬ、他に求められない便宜を得ることが多いだろう。

ドイツ語の辞典は通例ドイツでは、何よりもドイツ語の語義・語法を、ときに語形を知るために検索するものであるから、語形辞典の要素を加味した語義・語法辞典がすなわち国語辞典であるという状態が、当然、これまで永く続いてきた。そして今もなお根強く続いている。つまり、辞典の残余の面は、例えば発音は発音辞典に、語源は語源辞典にゆだねるという具合に、その他外来語・外国語も、類義語・反義語も、故事・諺・引用句も、略語・記号も、それぞれ専門の特殊辞典にまかせてしまうのである。この言ってみれば国語辞典の専門店式分業主義は、単にドイツに見られるだけでなく、多分広くヨーロッパのレキシコグラフィーの抜きがたい伝統であるといつてよいであろう。確かに、この伝統には、完全主義に徹することができるという長所がある。しかし、特殊辞典を幾種類も手許に常備しておいて、それらをいちいち検索するのは、なんといつても煩わしくて不便であり、また不経済でもある。それよりは、語義・語法・語形辞典という辞典全体の中核をなす本体のなかに、各種特殊辞典の成果を集約し合体したような、言わば総合的な辞典の便利さを、辞典の利用者は要望するだろう。ましてや、それが独和辞典であればなおさらであろう。この点を顧慮して、私たちの独和辞典は単に語義・語法・語形辞典たることに甘んぜず、さらに進んで、上述したような、多面的な幅とふくらみを持った、総合的な語学辞典たることを志向した。つまり、総合的語学辞典としての独和辞典の編纂が、私たちの目差す第二段の目標となったのである。そのために、私たちは各種の優れた特殊辞典の成果を消化し要約して、これを独和辞典のなかに組み入れることに力をつくした。これによって本辞典は、語義・語法・語形辞典としての本体が補強されただけでなく、辞典利用者の多方面の要請にひとまず対応できるようになったのではないと思う。それにしても、大辞典とはいえ、一冊本としての収載量には限界があるので、みすみす涙を吞んで割愛せざるをえなかった場合がまれではなかった。中でも残念だったのは、固有名詞・外来語・外国語の語源をも含む語源の記述である。当初の成稿はかなり詳細な興味深いものであったのだが、校正の段階に至り断腸の思いで大鈍を振るう破目になってしまった。尤も、ひそかにいささか自負しているところもあるので、思い切って言わせてもらえば、それはまず、近時頃に簇生しつつある略語の、今までかえりみられなかった読み方を示したことである。さらに、中国や韓国・北朝鮮の数多くの地名・人名・書名などを初めて見出し語として採択して、それらの発音を示したことである。双方とも、度重なる私たちの執拗な質問にその都度快く返書を寄せられた Herr Prof. Dr. M. Mangold の教示のたまものであるが、いずれもドイツの辞典界においてさえ、大げさにいえば、これまで未踏の領域であっただけに、本独和大辞典のひとつの誇るべき特徴に数えて差し支えあるまい。

一言語を対象とする辞典が、各種の特殊辞典の成果を簡約化して吸収し、総合的な辞典たろうとする気運は、近来ドイツにおいても徐々に胎動してきた。1981年に完結した Duden の 6 巻本のドイツ語大辞典 Das große Wörterbuch der deutschen Sprache (1976-81)——私たちが終始多大の恩恵をこうむってきたこの優れた独独大辞典は、こうした気運の先駆的な、しかも極めて大がかりな発現であると思えてよいだろう。ただそこでは、いわゆる「事典(ことてん)」的な要素を極力排除して、飽くまでも「語典(ごてん)」たることに徹しようとする強い禁欲的な意志が、全体を筋金のごとく貫いている。確かに、辞典が「語典」としての己れの分を守り節を曲げまいとする、ヨーロッパの、特にドイツの伝統的な潔癖さは、みごとというほかはなく、心からこれに敬意を払うことに私たちはやぶさかではない。しかし独和辞典は、とりわけそれが大辞典であればあるほど、よしんばかりにその無節操を指弾されようとも、安易にこれに追従するわけにはいかないのである。このことは Langenscheidt 社の 2 巻本の独英大辞典, Enzyklopädisches Wörterbuch der englischen und deutschen Sprache 略称 Der neue Muret-Sanders の Teil II, Deutsch-Englisch (1974-75) が、依然旧版と同じように Enzyklopädie への、Reallexikon への志向を併せ持っていることによって、間接的ながら裏書きされるだろう。卑近な例をひとつ挙げてみよう。読み進んでいるドイツ語の書物のなかに未知の名詞が出てきた場合、それが百科語彙である固有名詞であることを知らなければ、いや、知っているも、日本人の読者はまず独和辞典をひくくにちがいない。そんなとき、もしその名詞が見出し語に採録されていて、ドイツの町の名前であることが、あるいはヨーロッパの歴史上の人物であることが

記載されているとしたら、そういう独和辞典はその事典としての効用性のゆえに、利用者によって評価され歓迎されるだろう。英和辞典や仏和辞典なども同様だが、独和辞典は独英辞典などとは比較にならないほど、事典としての役割が辞典の利用者によって要求されるのである。総じて、利用者である日本人の多くがドイツのこと、さらに広くヨーロッパのことに疎いのであるから、この要求は十分納得がいくだろう。このために私たちは、独和辞典に百科事典の要素を加えることを、編纂上の今ひとつの大きな目標とした。勿論、独和辞典は本来語学辞典であって百科事典ではないので、謂うところの百科項目や百科的注解を無制限に増大するわけにはいかなかったが、一巻本の辞典の収載量の許すかぎり、人名・地名・専門語など、この面での充実をはかった。しかも、冒頭に述べた本辞典の主旨に添って、ここでも最新の鮮度を保つように最善をつくしたつもりである。なお、特に科学・技術その他の各分野の専門語については、それぞれの分野の専門家に訳語の検討・是正を乞うて正確を期した。これは独和辞典の世界では恐らく本辞典をもって嚆矢とするだろう。さらに、Brockhaus 社から譲りうけた図版おおよそ3000点を全巻にちりばめ、これによって本独和大辞典の事典としての面を視覚的・映像的に一段と増強したことも、自画自讃するようだが、独和辞典としては画期的な試みといっ

てよいだろう。

以上縷々述べたような、しかし当初はまだ模糊としていた編纂上の抱負を模索すべく、本辞典が発足したのは、昭和39年1月であった。そのときは高橋義孝氏（当時九州大学教授）を主に菊盛英夫氏（当時中央大学教授）と登張正實氏（当時東京大学助教授）、さらに岩崎と濱川が編輯メンバーとして名を列ねていたが、同年3月中旬旬高橋氏の慫慂によって国松が参画するとともに、高橋、菊盛の両氏は退き、同月末新たに橋本、小野寺、三城が参加した。こうして総勢7名によって、まず執筆要綱についての論議が活発につづけられて、いよいよ辞典編纂の仕事が本格的に開始された。翌40年7月には平尾が、41年4月には千石が加わったが、42年6月には登張氏が一身上の都合によって身を引くことになった。しかし翌43年12月には原田、中島が、さらに50年4月には新田が参加した。翌51年3月には、従前から発音の面にもっぱら関与してきた橋原が正規のメンバーに加わり、爾来私たち12名の者が編輯委員として直接編纂の仕事にたずさわることになったわけである。思えば発足以来二十有余年、私たちはそれぞれの主たる持場を定め、一致団結して、大聖堂の建設にも比すべき独和大辞典編纂の難事業と必死になって取り組んできた。気づいてみれば、曾ては国松をのぞいて全員が少壮気鋭であったのに、今はすでに岩崎・橋本・濱川の三名が耳順を過ぎ、国松に至っては喜寿を越えてしまった。それだけに、この間誰ひとり病に仆れることもなく、無事ここに竣成の日を迎えることができたことを、稀有の天祐として衷心から感謝せざるをえない。

勿論私たちは、多くの方々から寄せられた御厚情と御支援とを、決して忘れていたわけではない。原稿の作製と校正に協力を惜しまれなかった同学の諸兄、おびただしい数の専門語について、その訳語の是正にあたられた各分野の専門家の諸賢に対しては、ここに厚く感謝の意を表するとともに、特に御芳名を別にかかげさせていただいた。Brockhaus 社が本辞典のために Der Sprach-Brockhaus の図版全部を一括譲渡することを厭わなかった好意もまた、私たちの記憶のなかに長く残って消えることがあるまい。さらに、Duden 編輯部が本独和大辞典の進行を常に温かい目をもって見守り、何かと無償の便宜を提供されたこと、Duden の発音辞典の編者である Herr Prof. Dr. M. Mangold が献身的な熱意をもって発音面での指導にあたられたことには、ただただ感謝するばかりで、御礼のことは知らない。最後に、二十有余年の長きにわたり、終始理解と大度をもって本辞典の完成を支持しつづけられた株式会社小学館と、直接その衝に当たって日夜粉骨砕身された小学館独和辞典編集室の諸氏に、過ぎ去った歳月の思い出をこめて、心から感謝の微志を表明したい。それとともに、煩瑣な組版の仕事その他に鋭意苦心された共同印刷株式会社の諸彦にも、厚く御礼を申し上げます。

今筆を擱くにあたって、わが国における独和辞典の歴史に大きな足跡を印した先達の方々の上に、おのずから思いが馳せ、尊敬と感謝の念が頻りに胸底を徂徠する。本独和大辞典も驥尾に付し、独和辞典の長い道程の、せめても一里塚として、より一層の前進を促すすがとならんことを切に願ってやまない。そしてそのためにも、ぜひ諸家の斧正を仰ぎたいと思う。

編輯委員 Herausgeber

国	松	孝	二	Kôji Kunimatsu	東京大学名誉教授
岩	崎	英	二	Eijirô Iwasaki	慶応義塾大学教授
橋	本	郁	雄	Ikuo Hashimoto	学習院大学教授
濱	川	祥	枝	Sakae Hamakawa	成城大学教授
小	野	寺	和	Kazuo Onodera	東京大学教授
原	田	武	雄	Takeo Harada	南山大学教授
千	石		喬	Takashi Sengoku	東京大学教授
中	島	悠	爾	Yûji Nakajima	東京都立大学教授
平	尾	浩	三	Kôzô Hirao	東京大学助教授
三	城	満	禧	Mitsuyoshi Mishiro	東京大学助教授
櫛	原	良	行	Yoshiyuki Narahara	電気通信大学教授
新	田	春	夫	Haruo Nitta	東京大学助教授

発音監修 Dr. Max Mangold ザールブリュッケン大学教授

協力者 Mitarbeiter

● 執筆・校正協力

味	村	登	静岡薬科大学教授	福	原	嘉	一郎	早稲田大学教授
新	井	皓	一橋大学教授	増	田	義	男	東京医科歯科大学教授
諏	訪	功	一橋大学教授	発	音	重	実	東京大学助教授
野	入	逸	大阪市立大学教授					

● 執筆協力

有	泉	泰	男	日本大学教授	高	木		実	早稲田大学教授
石	井	不	二	東京大学助教授	信	岡	資	生	成城大学教授
石	丸	昭	二	お茶の水女子大学助教授	平	田	好	孝	金沢大学教授
植	田	兼	義	中央大学教授	吉	本	健	一	静岡大学教授
大	瀧	敏	夫	金沢大学助教授	歴史年表	坂井	栄	八郎	東京大学助教授
亀	谷	敬	昭	独協大学教授	固有名詞	関	楠	生	東京大学教授

● 専門語校閲

哲学・社会学	平	井	俊	彦	生物	江	原	有	信
論理学	磯	江	景	孜	植物	山	下	貴	司
	安	井	邦	夫	生物・動物・生化学	荒	木	忠	雄
心理学	吉	村	浩	一	動物	洩	谷	達	明
神話	吉	田	敦	彦	医学・遺伝	熊	澤	昭	良
宗教・神学・カトリック	鈴	木	宣	明	薬学・生理・遺伝	鈴	木	捷	三
聖書・新教	西	阪	盾	子	紡織工業・繊維	平	井	東	幸
歴史	豊	永	泰			湯	村	崇	男
紋章	森		護		服飾	石	山	井	彰
中国の固有名詞	伊	藤	敬	一	農業・園芸・林業	横	井	政	人
政治・法律	新	井	誠		交通・鉄道・印刷	藤	田	黎	明
経済	渡	辺	尚		美術・絵画	松	井	隆	夫
軍事	小	林	宏		音楽	寺	本	まり	子
統計・数学・物理	伊	藤	泰	宣	演劇・映画	岩	淵	達	治
天文・宇宙	的	川			スポーツ・体育	大河内	保	雪	

● 校正協力

石塚 茂清 寺本 襄二 福本 義憲 安井 啓雄 / 猪股 和夫 株式会社現代企画

凡 例

1 解説図



- 1-6
前つづり[的な構成要素]: →2-2-4
原語とその語義: →9-2
→ **diplō.** 《名詞・形容詞などにつけて「二重の・ペアの」などを意味する。母音の前では **dipl..** となる。→ **Diplopie** [gr. di-plóos] 例語(見出し語があれば訳語は省略する)
→ **„zwei-fach“**; ◇ **Zweifel** 関連語: →9-2
→ **Di-plō-do-kus** [dipló:dokus] 團 → **..ken** [..plodó:kən] 複数は **Diplodoken**
『古生物』ディプロドクス(竜脚類に属する恐竜)。
- 1-7
略語の性と変化: →8-5
希形: →2-1-3
声門破裂音: →3-2
→ **D. P.** [di:pi:] 團 安 --/-- = **Displaced person** 略語の原形: →8-5-1
→ **dpa** (**DPA**) [de:pe:] 団 団 --/ = **Deutsche Presse-Agentur** (ドイツ通信社(西ドイツの共同通信社)) (見出し語があれば訳語は省略することがある)
- 1-8
母音化しやすい [r]: →3-2
→ **Dur** [du:r] 団 --/ (↔ **Moll**) 《楽》長調: **A~** イ長調 | 借用経路と時期: →9-2
→ **A~Tonleiter** イ調長音階。 **mlat.-mhd.**; < **lat. dūrus** 由来する語源: →9-2
→ **„hart“** 語形変化により e が脱落した形: →7-3-2
→ **du-rā-bel** [durá:bəl] [..ra-bl..] 團 (dauerhaft) 永続的な, [lat.; < **lat. dūrāre** „härten“] 発音上の省略可能: →3-2-2
→ **Dur-alu-min** [dú:ralumin, du:ralumi:n] 団 -s/ 登録商標
→ 商標 ジュラルミン(アルミ合金)。 < [durabel + Aluminium] 混成要素: →9-2
- 分離動詞の分離線: →6-1
1-2
同形の語を区別する肩数
字: →2-1-2
アクセントの移動: →3-2-3
交換可能: →4-3-5
→ **durch-ra-sen** [dúrcra:zən] Ⅱ Ⅱ (s) 《durch et.*》(…を)高速で疾駆(通過)する。 語形変化に伴う [z] [s] の交替: →3-2
→ **durch-ra-sen** [dúrcra:zən] Ⅱ Ⅱ (h) 《et.*》(…を)高速で 結合成分: →6-3-1
→ 横断する(横切る)。 完了の助動詞: →6-2-3
→ 語句の省略: →4-3-10
- 1-10
→ **Fracht** [fraxt] 団 --/-en Ⅰ (積載)貨物, 積み荷; 《比》心の重荷, 負担: **die ~ löschen** (船が)荷おろしをする..... 省略可能(積載貨物または貨物): →4-3-4
→ **Fracht-brief** [fráxt:] 團 (貨物の)運送状, 送り状。
→ **damp-fer** 團 貨物船。 **emp-fän-ger** 團 貨物受取人, 荷受人。
- 1-11
意味上対応する英語: →4-1-4
→ **früh** [fry:] Ⅰ Ⅰ (英: **early**) (↔ **spät**) (時点の)早い; 初期の: **in ~er** (≈ **ester**) **Kindheit** 幼(「ごく幼い」)ころに | **das ~e Mittelalter** 中世初期 | 対義語: →4-1-3
→ **Ⅱ Ⅱ Ⅰ** → **Ⅰ Ⅱ** (am **Morgen**) 朝に: **gestern** (morgen) ~ きのう(あした)の朝に | 交換可能部分の対応: →4-3-5
形容詞の副詞的用法: →7-1-1
→ **Ⅱ Ⅱ Ⅰ** → **Ⅰ Ⅱ** (am **Morgen**) 朝に: **gestern** (morgen) ~ きのう(あした)の朝に | 同義の見出し語: →4-1-7
古語・古形を示す: →2-7
→ **früh-stens** [fry:stəns] = **frühestens** 7
→ **Früh-stück** [fry:stʏk] 団 [-e:s/-e] 朝食; 朝食時間: 2格は -s または -es: →5-2
→ **zweites** ~ 小昼(朝食と昼食の間にとる軽い食事) | **Arbeits-frühstück** 協議(交渉)のための朝食会 | **beim ~ sitzen** 朝食の食卓に向かっている | **das ~** [ein]nehmen 朝食をとる | **Um 9 Uhr machen wir ~** / **Um 9 Uhr ist ~**. 朝食は9時です | 用例の分類: →4-2-3
→ **Ⅱ Ⅱ Ⅰ** → **Ⅰ Ⅱ** (am **Morgen**) 朝に: **gestern** (morgen) ~ きのう(あした)の朝に | 省略可能(einnehmen または nehmen): →4-3-4
同義の用例: →4-2-2
→ **früh-stücken** [..kən] (過分) **..k.k..** (過分) **gefrüh-stückt** Ⅰ Ⅱ (h) 朝食を食べる(参考) **zu Mittag essen** 昼食を食べる, **zu Abend essen** 夕食を食べる。 Ⅱ Ⅱ (h) (…を)朝食に食べる: **Brot** (Eier) ~ 朝食にパン(卵)を食べる。 参考となる表現: →4-2-7
注意すべき過去分詞: →6-2-2
→ **früh-stücken** [..kən] (過分) **..k.k..** (過分) **gefrüh-stückt** Ⅰ Ⅱ (h) 朝食を食べる(参考) **zu Mittag essen** 昼食を食べる, **zu Abend essen** 夕食を食べる。 Ⅱ Ⅱ (h) (…を)朝食に食べる: **Brot** (Eier) ~ 朝食にパン(卵)を食べる。

2 見出し語

2-1 見出し語の配列は、人名・地名・略語・記号なども含めて、すべてドイツ語の *Abc* 順に従っている。

☆ ギリシア文字・シンボル記号は、それぞれ巻末にまとめてある：→付録「字母一覧」「記号の読み方」

2-1-1 ドイツ語特有の文字 ä, ö, ü, ß は、それぞれ a, o, u, ss の次とし、例えば、*fai-len—fäi-len, Mas-se—Mä-ße* の順になっている。

2-1-2 同じつづりの語では、かかし文字の小文字のものを前とし、例えば、*arm—Arm* の順になっている。

かかし文字も同じ語は、肩番号¹²で区別してある：→1-9

2-1-3 コンマで並べられた見出し語は、正書法の揺れなどによる、同義のものである：→1-1

丸括弧 () で添えられた見出し語は、比較的希形とされているもので、検索上の支障がない限り、*Abc* 順が多少破れていることがある：→1-3

見出し語の中で角括弧 [] で囲んだ部分は、それが欠けた形もありうることを示し、例えば、*Hel-le-gat(t)* の場合は、*Hellegat, Hellegatt* の両形がある。

2-1-4 大番号 *I II III* による「中見出し」は、品詞転用などによるもので、検索上の支障がない限り、上記の配列規程が多少破れていることがある：

Abend [ábant]¹ *I* 團-s/-e ... *II abend* 團 ...

föl-gen [fólgen]¹ *I* 團 ... *II föl-gend* 團分團 ...

記号 團分 添えられたものは、*Abc* 順による別の個所に、独立の見出し語として配置されている：→1-4

矢印 → で検索すべき「親見出し」を示すこともある：

Al-te → *alt II* — *alt II* に「中見出し」がある。

2-1-5 「頭出し」をしていない見出し語は、先行する（「頭出し」をした）見出し語との間に、派生・複合など多少とも関連をもつことを示唆する：→1-8

2-2 見出し語の語形は、主として *Duden* の正書法辞典 18 版 (*Mannheim*, 1980) によっている。

2-2-1 形容詞変化の名詞（形容詞・分詞の名詞的用法）は、弱変化単数 1 格の形で掲げた：→5-2-2

2-2-2 数詞・代名詞は、形容詞の場合に準じて、なるべく格語尾を省いた形で掲げた：

*acht*¹ [axt] *I* 《基数》... *II* 《序数》...

2-2-3 外国語による慣用語の類は、2 語以上からなるものも、そのままの形で見出し語とした：→1-3

2-2-4 部分省略符 „ を前または後に添えた見出し語は、それぞれ後つづり・前つづりの類を示す：→1-6

☆ この種のものは、便宜上すべて小文字を用いた。

2-2-5 分割符 ÷ を入れた複合語は、その前半が共通の複合語が続くことを示し、後続の語は、後半部だけを「追いつ込み見出し」としてある：→1-10

2-2-6 見出し語に用いたハイフン - は、正書法上つねに必要とされるものである：*Jch-Laut*

2-2-7 見出し語の頭の⁹印は、古語・古形または希語・希形・希用であることを表す：→1-11

2-3 見出し語の分綴でできる箇所は、分綴点・で示した。

大きな分綴点・は、語構成上の区切りと一致する箇所であるが、ふつう 1 箇所だけにとどめた：→1-2

2-3-1 複合語の分割符 (→2-2-5)、つねに必要なハイフン (→2-2-6)、複合動詞の分離線 (→6-1-2) も、本来は大きな分綴点に相当する。

2-3-2 記号 團分 による注記は、分綴によってつづり字の変更が生じることを示す：→1-4

2-3-3 語形変化に伴う分綴箇所の変動がありうる。詳細

は付録の「分綴法」を参照されたい。

3 発音の表示

3-1 見出し語に添えた発音符号は、ドイツ語の一般的発音規程による、おおよその発音を示す：→1-3

— 長母音

・ アクセントのある短母音

・ アクセントのある長母音および二重母音

3-2 音標文字による表示は、大筋において国際音声表記 (*IPA*) によったが、若干の工夫を試みた。

[ə] 脱落することもある [ə]: →1-4

[r] 母音化して [e] になりやすい [r]: →1-8

[ar] 母音化して [e] になりやすい [ar]: →1-1

[i] *IPA* の [ɨ] に当たり、次の母音は先行の音とはっきり区切られて発音される：→1-7 (また「発音解説」4-2)

[ɨ] 二音が破擦音 [p] [ts] [tʃ] [dʒ] や二重母音でなく、別々に発音される：→「発音解説」4-7, 3-6

[ɨ] アクセントのない語末の半長音：→「発音解説」3-8

[ɨ] アクセント記号で、母音の真上に添えてある。特に第二アクセントを示す必要がある [ɨ] を用いた。

[ɨ] 直前の語と同一であることを示す：→1-4

[ɨ] 表記の一部を、直前の語や複合語の基礎語などにゆだねて省略していることを示す：→1-10

[ɨ] 語形変化に伴う有声子音・無声子音の交替 ([b] [p], [d] [t], [g] [k], [ʃ] [s], [v] [f]) を示す：→1-9

[ɨ] 語形変化に伴う子音 [g] [ç] の交替を示す：→1-4

3-2-1 いくつかの表記がある語では、最も普通とされるものを優先してある：→1-8

何らかの限定があるときは、適宜その旨を注記した：

Che-mig [çemít; ʧemít; kemí]

da-bei [dabár; 指示的強調: dá:baɪ]

外国語や外国の人名・地名で、ドイツ語ふうの発音もあるときは、一般にそれを優先してある：

Shake-speare [ʃékspiːr; ʃékspia]

3-2-2 丸括弧で囲んだ部分は、省略できる：→1-8

見出し語の省略可能部分に対応することがある：

fluß-áb(-wärts) [flus(á)ps(verts)]

3-2-3 略記法 [ɨ] のような形は、直前の表記とのアクセントの違いだけを示すもので、短母音の音節を [ɨ]、

長母音・二重母音の音節を [ɨ] で示している：→1-9

3-3 略語・記号についても、原形に復して読まれるもの以外は、つとめて発音を明示した：→1-7

4 語義と用例

4-1 語義の分類記述には、個々の語義の相互的連関に配慮しながら、つとめて現代の普通の語義を優先した。

4-1-1 語義分類には一般に **1 2 3** を使い、ときに **a) b) c)** で小区分を施したが、特に必要な場合は ① ② ③ で細分したものもある。

同じ語義番号内のセミコロンは、語義のやや大きな隔たりを示す：→1-10, 1-11

大番号 *I II III* は、動詞における自動詞・他動詞の別、名詞化した不定詞、形容詞化した分詞や、形容詞・分詞の名詞的用法、名詞の性の違いなど、一般に品詞レベルに準じた大区分に用いている：→1-4

特に記事の多い語では、*bei* や *gehen* などのように、冒頭に「目次」を設けて、全般的展望と検索を助けた。

4-1-2 語義の前に () で挙げたドイツ語は、語義理解に役立つと思われる同義語を示す：→1-4, 1-8

4-1-3 語義の前に (↔) で挙げたドイツ語は、語義理解に役立つと思われる対義語を示す：→1-1, 1-11

4-1-4 語義の前に(英:)で挙げたイタリック体は、語義理解に役立つと思われる英語の対応語を示す:→1-11

これは必ずしも完全に同義とは言えないことがある。
また、記事の少ない語では、同根の英語形を、語源欄の関連語として挙げるにとどめることも多い。

4-1-5 語義の前に(<)で挙げたドイツ語は、短縮語その他の派生関係について、その原形を示す:→1-3

4-1-6 語義の後の(→図)の指示は、図版が添えられていることを示し、他の見出し語の図版を指示するときは、その見出し語を添えてある:→1-2

4-1-7 等号=は、語義の等しい他の見出し語〔の語義番号〕を指示する:→1-5, 1-11

4-1-8 すぐ近くに配列されている見出し語からの派生語では、次のような簡略な記述にとどめることがある:

Ab-mes-ser [ápmesə] 團-s/- abmessenする人。

Bös-wil-lig-keit [..kat] 団-/ böswilligなこと。

Ein-flö-Bung [..sun] 団-/en einflößenすること。

4-2 用例は、語義区分ごとにまとめて掲げた。

4-2-1 個々の用例は|で区分し、それぞれ訳文を添えた。
訳文の間のコンマは同種のものの、セミコロンはやや異種のものの区切りを意味し、場合によりi) ii) iii)で区別することもある。

4-2-2 用例の間の/は、その前後のものが同義であることを示し、訳文は後のものに続けてある:→1-11

4-2-3 用例は||で分類し、特に必要なときは|||で大別することがある。

用例分類に添えた[]は、分類規準を示す:→1-4

同じ分類に属する用例は、特に記事の多い語では、分類上のキーワードのAbc順に配列し、また必要に応じてボールド体を用いて、検索の便を図った。

4-2-4 用例の途中または末尾の(=)は、他の見出し語による同義の表現を、参考までに掲げたものである:

an-der-s [ándars] 團... | jemand ~ (=jemand andere) als er 彼以外のだれかが|...

4-2-5 訳文の代わりに(→)で掲げたものは、同形の用例が他の見出し語・語義番号にあることを示す:

Flam-me [flámə] 団-/n ... | Feuer und ~ speien (→Feuer 1) ... —Feuer 1に訳文がある。

訳文の後にある(→)は、そこに何かの関連した情報がありうることを示す。

4-2-6 用例中の~は、見出し語をそのままの形で代理する。内部が変わる場合、かしら文字の大小が変わる場合はイタリック体で全書した:→1-4

名詞・形容詞などが語尾をもつだけの場合には~er, ~enなどとし、名詞の格を明示するときは~³, ~⁴のように記した。動詞は不定詞だけを~とした。

4-2-7 訳文の後の(参) (参)は、それぞれ参考となる、誤りとされる語法である:→1-11

4-2-8 用例中の—は、対話の応答を示す:

la-la [lála] 團... | Wie geht's dir? — So ~. ご機嫌いかが—まあまあね|...

4-2-9 用例を囲む《》は、書名・作品名を示し、訳文は『』で囲みである:

al-so [álzo] 團... | 《Also sprach Zarathustra》『ツァラトゥストラはこう言った』|...

4-3 語義・用例の補足記号には、次のものがある。

4-3-1 語義番号・用例の前の▽印は、古義・古形または希語・希形・希用とされるものを示す:→1-4

4-3-2 語義・用例欄の《》は、広く文法上・文体上の情報を提供する:→1-3, 1-5

位相・方言に関する指示(→表紙見返しの「略語表」

D)は、多少とも正常なレベルから離れていることを表しているため、使用の場面には十分な注意を要する。

4-3-3 語義・用例欄の《》は、その所属分野(→表紙見返しの「略語表」E)を示すが、これは必ずしも専門術語とは限らず、訳語の補足に当たることも多い:→1-1

☆ 聖書に由来するものは《聖》とし、その篇名は10に掲げた略称によっている。

4-3-4 角括弧[]は、省略可能な部分を示す:→1-10

用例・訳文で対応していることがある:

fra-gen* [frá:gan] ... | [jn.] um et.⁴ ~ [...に]...を求める| ... —um et.⁴ ~ ...を求める, jn. um et.⁴ ~ ...に...を求める

4-3-5 三角括弧<>は、先行する部分との交換可能を示す:→1-4

用例・訳文で対応していることがある:→1-11

4-3-6 《>や<>内での/は、その前後が交換可能であることを示す。対応する和文では・を用いる:

ach-ten [áxtən] ... 《et.⁴ für et.⁴ / [▽]et.⁴ et.⁴》(...を...と) 見なす, 思う...

Bei-spiel [bái:spil] ... | ein konkretes <treffendes / typisches> ~ 具体的な(適切な・典型的な)例...

4-3-7 イタリック体の記号の使用は、次の四種がある:

一般的に人を示す個所は、1格jd., 2格js., 3格jm., 4格jn.で表した。

☆ js.の場合は2格形のほか所有代名詞も使えることがある。

一般的に事物を示す個所は、1格et.¹, 2格et.², 3格et.³, 4格et.⁴で表した。

再帰代名詞は、3格sich³, 4格sich⁴で表した。

主語・目的語に対応して「自分の」を表す所有代名詞は、seinで代表させた。

4-3-8 記事末尾の☆☆は、語義・用法についての包括的補注を表す。このうち☆はその語義区分内について、

☆はより広範囲に、そこまでの数個の語義区分、しばしば見出し語全般について述べるときに用いた。

4-3-9 ㊦(電)に続く形は、その語句のそれぞれ略語・記号の形を示す:→1-3

4-3-10 点線...は語句の省略を示し、欧文では..., 和文では...とした:→1-9

4-3-11 用例中の名詞の肩数字は、特にまぎらわしい場合の格を示す。

5 名 詞

5-1 品詞名は、性別などの表示で兼ねてある。

5-1-1 團(団)はそれぞれ男性名詞・女性名詞・中性名詞を示し、性に揺れがあるものは併記した。また一方がまれなとき、限定があるときは()で示した。

Drit-tel [dritəl] 団(参:團-s/-) ...

略語についても、つとめて性別を明示した:→1-7

5-1-2 團は複数名詞を示す: **Fē-ri-en** [fé:rian] 團...

5-1-3 区(区)は特定の人物名・神名を示し、必要に応じてフルネームを注記した:

Hēi-ne [háina] 区(区)Heinrich ~ ハイノリヒハイネ...

女性扱いのものは、補足説明で示唆してある:

De-mē-ter [demétar; ㊦:㊦: déimetar] 区(区)『女神』デメル(農産の女神...)

5-1-4 男(男)区(区)は姓名の名に当たる:→1-3

5-1-5 施(施)は中性の地名で、単独では無冠詞で用いる:

Mün-chen [mýnçən] 施(施)ミュンヘン...

その他の地名には性・変化を示し、補足説明で地名であることを示唆した。つねに必要な定冠詞は、見出し語

に添えておいた: **der Rhein** [rain] 團 -[e]s/ ライン...

- 5-2 語形変化の斜線 / は、前後にそれぞれ単数 2 格・複数 1 格を示す: →1-5

斜線の右側が空白のときは、複数形を欠く: →1-4

複合語では一般に変化指示を省略したが、複数形が普通なとき、基礎語からの類推が困難なときなど、必要に応じて明示してある。

- 5-2-1 コンマで並記した変化形は、それぞれの形があることを示すが、希形とされるとき、限定のあるときは () で囲んだ:

Kli-ma [kli:ma:] 團 -s/-s, -te [kli:má:ta:]

Kind [kint:] 團 -es (-s)/-er ...

Bö-gen [bø:gan] 團 -s/- (南部: Bögen [bø:gən]) ...

変化形の中の [] は省略可能を示す: →1-11

部分省略符 .. は語幹の一部を含むことを示す: →1-6
..loge に終わる名詞の (→..loge) という注記は、古くは ..log に終わる形があり、その場合は -en/-en となることを表す。

- 5-2-2 《形容詞変化》は形容詞変化の名詞 (形容詞・分詞の名詞的用法) で、見出し語は弱変化単数 1 格の形である: **Be-äm-te** [bə:ámte] 團《形容詞変化》...

中性のものは、単数形だけを用いる。

- 5-2-3 注記 (単位: -/-) は、単位として数詞とともに用いるときは無変化であることを示す:

Grad [gra:t] 團 -es (-s)/-e (単位: -/-)

注記 (種類:) は、種類を言うときの複数形を示す:

Sand [zant:] 團 -es (-s)/(種類: -e)

- 5-2-4 ㊦ ㊦ に続くボールド体は、それぞれ縮小形・女性形を示し、原則として発音・性・変化を示した: →1-5
女性形は性の表示を省略した。
まれに㊦によって男性形を示した。
これらの形の語としての独立性が強いときは、特に独立の見出し語とし、そこに記事を掲げた。

6 動詞

- 6-1 品詞名は、種類の表示で兼ねてある。

- 6-1-1 ㊦ ㊦ はそれぞれ自動詞・他動詞を示し、両用のものは、原則として大番号 **II** で区別した: →6-5

㊦㊦ ㊦㊦ は、それぞれ現在分詞・過去分詞を示し、形容詞化したものは ㊦㊦ ㊦㊦ などとした: →2-1-4

- 6-1-2 見出し語の分離線 / は、分離動詞の前つづりが分離する箇所を示す: →1-9

- 6-2 見出し語の星印 * は、不規則変化を示し、規則変化形が含まれるものでは * とした: →1-4

語義・用法により変化方式が違うときは、それぞれの個所に《規則変化》《ふつう不規則変化》などと注記した。

- 6-2-1 不規則動詞に添えた () 内の 11-220 の数字は、付録「動詞変化番号表」の動詞番号に対応する: →1-4

基礎動詞と、基礎動詞を欠く複合動詞では、念のため変化形を「過去 / 過去分詞」の形によりボールド体で掲げ、必要に応じて、㊦㊦ ㊦㊦ により直説法現在・命令法単数・接続法第二式現在の形を示した: →1-4

- 6-2-2 規則動詞に添えた () 内の 01-06 の数字は、付録「動詞変化番号表」の動詞番号に対応し、音便的な破格をもつものである: →1-9

過去・過去分詞の注意すべき形は、㊦㊦ ㊦㊦ により () 内に特に注記した: →1-11

- 6-2-3 丸括弧 () 内の h, s は、完了の助動詞として、それぞれ haben, sein を用いることを示す: →1-9

双方とも用いられるときは (s, h) のように併記し、一方が明らかに優先的なときは (h, まれに s) などとした。

- 6-3 語義・用例に添えた () には、広く語法上の注記を施してある。

- 6-3-1 *et.*, *jm.* など (→4-3-7) による格支配指示は、ふつう語義・用例訳の () による補足と対応する: →1-4
《量を示す 4 格と》《様態を示す語句と》など、日本語によって結合関係を示すことも多い:

ankommen* [áńkómən] (80) **I** ㊦ (s) **1 a** (《方向ではなく場所を示す語句と》(…に)着く, 到着する...

- 6-3-2 《不定詞で》《受動態なし》など、用法上の限定を示すこともある。

- 6-4 いわゆる非人称動詞・再帰動詞は、自動詞・他動詞の非人称的・再帰的用法とみなした。

- 6-4-1 ㊦㊦ は再帰的用法を表し、再帰代名詞の格を明示した: →1-4

- 6-4-2 ㊦㊦ は非人称的用法を表し、() でそのパターンを示した:

regnen [ré:gnən] (01) ㊦ (h) ㊦㊦ (es regnet) 雨が降る(降っている)。

- 6-5 自動詞・他動詞の別は、4 格の目的語をもつものを他動詞としたが、語義記述の関係で多少の例外がある。

- 6-5-1 いわゆる同族目的語や結果を示す語句中に 4 格が現れる表現は、自動詞の項で扱うことが多い:

gehen* [gē:ən] (53) ... **I** ㊦ (s) **1 ... b** (h) 《結果を示す語句と》歩きすぎて…の結果となる...

- 6-5-2 他動詞の絶対的用法は、ふつう自動詞としない:
essen* [ésən] (36) ... **I** ㊦ (h) ...; 《目的語なしで》食事をする...

7 形容詞・副詞

- 7-1 品詞名を ㊦ としたものは、一般に副詞としても用いられることを示す。

用法に限定のある形容詞は、() で注記した:

heutig [hóytɪç] ㊦ **1** 《付加語的》きょうの...

- 7-1-1 大番号で ㊦ としたものは、副詞として独自の語義用法もあることを示す: →1-11

- 7-1-2 ..weise に終わる副詞で (→..weise ★) の注記があるものは、まれに付加語的形容詞として用いられることを表す。

- 7-1-3 言語名に関する形容詞で、用例欄に →deutsch とあるものは、特に名詞的用法が同様であることを示す。

- 7-1-4 名詞的用法は、一般に大番号による「中見出し」として掲げ、変化様式を示した:

dunkel [dúńkəl] **I** (dunk-l.) ㊦ **1** **II** **Dunkel** ㊦ -s/ **1** **III** **Dunk-le** [dúńklə] ㊦《形容詞変化》.....

Abc 順が離れるときは、「から見出し」を設けてある:

Dunk-le [dúńklə] →dunkel **III**

- 7-2 斜線 / の前後のボールド体は、不規則な比較級・最上級の形を示す:

jung [juń] **jün-ger** [jýńər] / **jüngst** **I** ㊦ (英: young) ...
gern [gern] (**ger-ne** [gérnə]) **lię-ber** [li:ber] / **am lię-sten** [am li:stən] ㊦ **1 a** (freudig) 喜んで...

意味上は比較変化がありそうで、しかも比較級・最上級を欠くものは、特に注記してある:

fertig [fértɪç] ㊦《比較変化なし》**1 a** 完成した...

- 7-3 形容詞の特殊な語尾変化は、次のように注記した。

- 7-3-1 注記《無変化》は、付加語的用法で格語尾をもたないことを示す。

- 7-3-2 丸括弧で (..ta-bl..) のような形の注記は、原級の格変化と比較級をつくるときに、語幹末の e が脱落することを示す: →1-8

ただし **e** が脱落しないこともあるものでは、次のように省略可能な [] を用いて示した:

ei·gen [áigən] **I** (eig(e)-n..) 図 1 (英: own) ...

☆ この場合, **e** が落ちれば **eig·ne**, 落ちなければ **ei·ge·ne** のように分綴点が入ることになる。

8 その他の品詞

8-1 図は前置詞を表し, 格支配その他の特性を《 》で注記した。

8-2 図は接続詞を表し, 並列・従属の別その他の特性を《 》で注記した。

8-3 図は間投詞を表し, 感情や音源などを《 》で注記して, 訳語を補足した。

8-4 冠詞・代名詞・数詞は品詞記号によらず, その種別を直接《 》で記し, それぞれの特性に応じた解説を加えたが, いわゆる分類数は副詞扱いとした。

数詞の一般的用法は, **fünf** とその派生語の項に示し, 個々の数詞には, それぞれの特殊用例だけを挙げた。

8-5 図は略語を表し, 原形に復して読まれるものを除いて発音を示すとともに, 名詞的性質のものには, 性・変化を挙げてある: →1-7

8-5-1 原形のボールド体は, 略語に生かされた文字を示し, 原形がそのまま見出し語となっているときは, 訳語を省略した: →1-7

8-5-2 原形の挙がっている箇所では, (図) で略語形を示した: →1-3

8-6 図は記号を表し, 発音を示した:

Au² [a:ú:, golt] 図(金) (Aurum) 《化》金 (=Gold)。

8-6-1 原形の挙がっている箇所では, (図) で記号形を示した。

8-6-2 シンボル記号などは巻末にまとめた: →付録「記号の読み方」

9 語源

9-1 語源は [] で囲んで語義・用例の後に示し, 併せて関連語により語彙的知識の拡充に資した。

9-1-1 語源欄のイタリック体は, 解説用の言語名で, 一般

に **..isch** を省いた形で略記した。その他の略記形は, 表紙見返し「略語表」F に掲げてある。

9-1-2 語源欄の最初に *germ., westgerm., ahd., mhd.* および *mnhd.* としてあるものは, それぞれゲルマン語・西ゲルマン語・古高ドイツ語・中高ドイツ語・中低ドイツ語 (→付録「ドイツ語の歴史」) にまで遡りうる固有語 (土着語) であることを示す: →1-5

9-1-3 語源欄の最初がその他の言語であるときは, その言語からの借用語 (外来語) であることを示す: →1-3

9-2 語源欄の記号には, 次のものがある:

ー 外来語の借用経路を示し, 例えば *gr.-lat.-fr.* はギリシア語からラテン語・フランス語を経てドイツ語に入ったことを表す。

経路の最後が 9-1-2 に挙げた言語名となっているときは, ドイツ語ないしゲルマン語への借用時期をも示唆する: →1-8

< 派生・複合などの基礎となった語形を示し, 例えば **al·tern** [**Alter**] は, **altern** が (**alt** から直接ではなく) **Alter** から派生したことを表す。

外来語では, 原語における派生源などを表していることが多い: →1-8

+ 複合・混成の構成要素を並列する: →1-8

◇ 語源的に同根・同系など, 関連のある語を挙げるのに用い, 特に英語との対応に意を用いた: →1-3

„ 原義を示し, 古形や外国語の語形に添えてあるときは, その語の代表的意味に当たる現代ドイツ語を掲げてある: →1-6

9-2-1 語源欄の語形に (→) で添えた語は, それが見出し語となっている箇所の語源欄に, その語形についての記述があり, その意味で両者の関連があることを示す: →1-2

9-2-2 語源欄で (◇) で掲げた語は, 語源上多少の関連があるというほどの意味を表す。

9-3 語源上で何らかのつながりのある見出し語が連続するときは, 先頭の語以外は頭出しをしないで相互の連関を示唆してある (→2-1-5, 1-8) ので, 語源欄は原則として最も基礎的な語に設けた。

10 聖書篇名の略称 (°印は旧約, その他は新約)

哀 °哀歌
アモ °アモス書
イザ °イザヤ書
エス °エステル記
エズ °エズラ記
エゼ °エゼキエル書
エペ °エペソ人への手紙
エレ °エレミア書
I 王 °列王紀上
II 王 °列王紀下
オバ °オバデヤ書
雅 °雅歌
ガラ ガラテア人への手紙
I コリ コリント人への第一の手紙
II コリ コリント人への第二の手紙
コロ コロサイ人への手紙
I サム °サムエル記上
II サム °サムエル記下
士 °士師記
使 使徒行伝
詩 °詩篇
出 °出エジプト記

申 °申命記
箴 °箴言
ゼカ °ゼカリヤ書
ゼバ °ゼバニヤ書
創 °創世記
I 代 °歴代志上
II 代 °歴代志下
ダニ °ダニエル書
I テサ テサロニケ人への第一の手紙
II テサ テサロニケ人への第二の手紙
テト テトスへの手紙
I テモ テモテへの第一の手紙
II テモ テモテへの第二の手紙
伝 °伝道の手紙
ナホ °ナホム書
ネヘ °ネヘミヤ記
ハガ °ハガイ書
ハバ °ハバクク書
ビリ ビリビ人への手紙
ピレ ビレモンへの手紙
I ペテ ペテロの第一の手紙
II ペテ ペテロの第二の手紙

ヘブ °ヘブル人への手紙
ホセ °ホセア書
マコ マルコによる福音書
マタ マタイによる福音書
マラ °マラキ書
ミカ °ミカ書
民 °民数記
黙 °ヨハネの黙示録
ヤコ ヤコブ書
ユダ ユダの手紙
ヨエ °ヨエル書
ヨシ °ヨシュア記
ヨナ °ヨナ書
ヨハ °ヨハネによる福音書
I ヨハ °ヨハネの第一の手紙
II ヨハ °ヨハネの第二の手紙
III ヨハ °ヨハネの第三の手紙
ヨブ °ヨブ記
ルカ °ルカによる福音書
ルツ °ルツ記
レビ °レビ記
ロマ °ローマ人への手紙

発音解説

1 ドイツ標準語の発音

方言分化の著しいドイツ語にあっても、現在の標準ドイツ語(Hochdeutsch)は18世紀末には文章語としてはほぼ統一を見たと言われている(付録「ドイツ語の歴史および現況」参照)。しかし、発音に関してはまだかなりの地域差があった。文章語と自己の方言との隔たりが大きかった北ドイツでは、文章語を文字どおりに読むことが推奨され、これが各地にひろまったので、これによって逆に標準語には、低地ドイツ語の音を含め各地の方言音が取り入れられた。19世紀になると文章語の口頭での使用頻度が増し、その発音の統一の要求も高まった。また、音声学の発達によって発音を体系的に記述することが可能となり、1885年に Wilhelm Viëtor (1850-1918)、1898年には Theodor Siebs (1862-1941) らによって発音辞典が刊行され、これらは文章語の発音に規準を与えることに貢献した。発音辞典の編纂に際して彼らは、各地で行われている標準語の発音を参考にしたことはもちろんであるが、舞台での俳優の発音も模範とした。これは19世紀初頭に Goethe が古典劇に地方なまりのない純粋な発音を要求していることからわかるように、演劇の世界では発音についての関心が高く、その統一に熱心であったためである。このようにドイツ標準語の発音は、東京方言に基礎を置く日本の標準語やロンドンを中心とする上流階級の発音に拠っている英国の容認発音などとはややその成立の経緯を異にしている。

その後、標準語の発音は学校教育に取り入れられ、マスコミュニケーションでも使用されたので、方言や日常語の上に立てあゆる公的な場所で用いられる、通用範囲の最も広い用語として確固たる地位を占めるに至った。

一方、標準語は日常語などとの絶えざる交流によってそれらの影響も受けていること、標準語の模範とされた舞台での発話とは当然マイクの前での発話とはその性質を異にするものであること、r音に舌先のふるえ音を要求するなど、当初の規準には現実そぐわないものもあったこと、標準語の発音にも発話の場面や速度によってかなり変動の幅があることなどから、しだいに標準語の発音の規準の改訂が試みられるようになった。その点で目立つのは、東ドイツの発音辞典《Wörterbuch der deutschen Aussprache, 1964》である。同書では俳優やアナウンサーなど標準語の職業的な話し手の発話の分析に基づいて、従来の規準では認められていなかった音の弱化や同化を許容している。その後、西ドイツで刊行された発音辞典《Siebs, Deutsche Aussprache 第19版, 1969》や《Duden Aussprachewörterbuch 第2版, 1974》(以下 Duden² と略称)でも、標準語の発音の規準が大幅にゆるめられている。これは東ドイツと同様、西ドイツにおいても標準語の発音に変化が生じていることを示すものであろう。本辞典の発音表記は最初 Max Mangold 教授と Duden 編集部編の《Duden Aussprachewörterbuch 第1版, 1962》に拠っていたが、その後、東西ドイツで前述のような発音辞典の刊行や改訂が続いたので、Duden² をはじめとしてこれらの新しい資料も参考にした。

わが国では相良守峯編『大独和辞典』で、信貴辰喜氏が日本人学習者を考慮に入れて、例えば、消えやすい音をイタリック体で表すなど、独和辞典に適した発音表記の方法を考案されたが、これはその後のドイツの発音辞典にも影響を与えているほどである。本書ではこれも参考にした。

オーストリアとスイスのドイツ語圏にはそれぞれ地域的な標準発音の規準があり、それがドイツの標準発音とは異なることもある。このような場合、本書ではオーストリアまたはスイスの発音の変種の前にその国名を付している。これらの発音が隣接の南ドイツにおいても行われていることもあるが、その指示は省略した。

外来語や外国語の固有名詞はドイツ語化して発音されるのがふつうであるが、そのドイツ語化の程度はその語のドイツ語への同化の程度によって変化するため、外来語には発音の変種が多い。本書では、原則としてドイツ語化発音を優先しているが、原語に近い発音も随時示した。その際、その国語名は省略している。

Mangold 教授からは、文献では解決できなかった個々の語の発音を教えていただいたほか、中国語と朝鮮語の固有名詞および略語と記号に関しては、全面的な指導監修をいただいた。中国語の固有名詞については、従来の見出し語と拼音(pīnyīn)の見出し語の両者を示し、前者にドイツ語化発音、後者には中国語の標準発音と四声を示している。両者のつづり字が同じ場合には、ドイツ語化音と中国語音との順で併記している。Mangold 教授によると拼音はドイツでも普及する傾向にあるが、その発音はまだ動揺しているという。

略語と記号については、これまで、ドイツでも体系的に取り扱われたことはなかったが、本辞典では個々の語についてそれがアルファベット名称で読まれるか(◎SPD [spe:di:]、独立の語のように読まれるか(◎UNO [ú: no:]),あるいは元の形に戻して読まれるか(◎z. B. = zum Beispiel)を明記している。ただし、Mangold 教授の補足的説明によれば、略語の読み方は場合によって変わることがあり、例えばBIは世間一般ではBibliographisches Institut(文献編纂所)と読まれるが、編纂所内では[be:|:]と言われるという。また、BWV 20は放送でも音楽専門家の間でもBachwerkeverzeichnis 20(バッハ作品目録20)と略さずに読まれるが、BWV 130, BWV 135...などと列挙される場合は[be:ve:fau ..]とアルファベット名称で読まれる。また、略語が数字に添えられるか語に添えられるかによっても読み方が異なり、例えば、B 40 [b: firtsɪç] (国道40号線)に対してB Saarbrücken-Frankfurt (Bundesstraße ... (国道…線)と略さずに読まれるという。

2 音声器官

図1は人間の音声器官の略図である。音の生成にはふつう呼吸が利用されるから、気管支・肺なども音声器官の一部と言える。

喉頭にある声門から上唇または鼻孔までの管状の部分を生声道(Ansatzrohr)と呼ぶが、我々はこの部分の形状を適当に変えることによって、さまざまな言語音を生成する。

調音音声学では声道内の比較的自由に動かせる器官、例えば、下唇・下顎・舌の各部分などを下部調音器官と呼び、口腔の上側の上歯・歯茎・口蓋や咽頭壁など受動的に調音にあずかる部分を上部調音器官と呼んでいる。上部調音器官と下部調音器官が組み合わされて調音位置がきまる。そして、調音位置と調音様式(例えば閉鎖、摩擦など)に基づいて言語音を分類している。声道内の空気を振動させ、口や鼻孔から言語音を発するためには音源が必要である。声門の声帯の周期的な振動はその代表的なものであるが、声道内に他の音源が生ずることもある。以下、言語音の種類別に、音の生成過程と音響的な性質について略述する。

図1 音声器官



2-1 母音 (Vokal)

声道の途中に閉鎖や極端な狭めがないのが特徴である。母音の種類によって喉頭の位置・下顎の開き・舌の位置と形・唇の形などが異なり、それによって各母音に特有な声道の形状ができる。音源は声帯振動であるが、これは呼吸が声門を通過する際にひきおこす声帯の断続的な動きであり、これによって周期性のパルス波が発生する。その周波数スペクトルは基本周波数成分とその整数倍の多数の倍音の周波数成分から成り、高い周波数成分ほど弱い。声道はその形の相違に応じてそれぞれ独自の共鳴特性(伝達特性)をもつので、声帯波が声道を通過する際に、その倍音のうちで声道の共鳴周波数に近いものが強調され、いくつかのピークをもつようになる。このピークの位置によって母音の音質がおおむね決定される。このピークはフォルマント (Formant) と呼ばれ、低い方から F_1 , F_2 , F_3 ... と呼ばれる。ドイツ語の母音の測定例では [i] ($F_1=250$ Hz, $F_2=2400$ Hz), [a] ($F_1=686$ Hz, $F_2=1213$ Hz), [u] ($F_1=250$ Hz, $F_2=668$ Hz) などである (図2 参照)。

このように母音の音色を決定するのは、声道の伝達特性であって、声帯振動ではない。しかし、声帯振動の基本振動数は声道を通して口から放射される音波の基本周波数であるので、声帯振動数を変えらることによって音声に高低の変化(抑揚)をつけることができる。

2-2 鳴音 (Sonor)

鼻音・側音・ふるえ音などがこれに属する。声帯を音源として、声道の一部に狭めまたは閉鎖があっても、口または鼻孔から呼吸が自由に抜け出せる通路が何らかの形で確保されている点で母音に似ている。例えば鼻音 [m] は口が閉じているので口腔は行き止まりの分岐管となっているが、口蓋垂が下がっているから呼吸は鼻腔を通して流出できる。このような形の声道では共鳴は母音と同様に起こるが、同時に反共鳴がある。つまり、特定の周波数成分が弱められるために全体としての共鳴は母音ほど強くない。

2-3 障害音 (Obstruent)

摩擦音・破裂音などがこれに属する。

摩擦音 声道の途中に狭窄があり、呼吸がこれを通過する際に乱流が生じ、雑音源となる。狭窄の位置や形状と声道の形により各摩擦音に特有の音色が生じる。例えば [s] と [ʃ] を比べると [s] は [ʃ] よりも高い周波数成分を含む。

破裂音 声道のある個所が閉鎖される。閉鎖中は無音であるが、閉鎖の破裂による呼吸圧の変動が音源となる。破裂音の種類によって、例えば [p] は唇、[k] は軟口蓋など閉鎖の位置が異なるので、次の母音へ移行する際の声道の

形の変化の仕方も相違する。これが各破裂音に独特の音色を与えている。破裂音の閉鎖が徐々に解かれ、その際に同じ調音位置の摩擦音を伴う音は**破擦音**と呼ばれる。

有声と無声 上述のように障害音は声道内のどこかに音源を持っているが、これに声帯振動を伴う場合が有声子音、そうでないものが無声子音である。例えば、[b] と [p] は閉鎖の位置は同じでも、前者には声帯振動があるが、後者にはそれがない。

3 母音

ドイツ語の母音には単母音と二重母音がある。表1は単母音を調音上の特徴に基づいて分類したものである。二重母音としては [ai], [au], [ɔy] がある。

[i], [e], [y], [ø], [u], [o] は古典語系外来語の学校発音 (Epitheton [epiteton]) やオーストリアの発音 (Rubrik [rubrik]) などを除けば、非アクセント位置にのみあらわれるので、これらはそれぞれ長母音 [i:], [e:], [y:], [ø:], [u:], [o:] の非アクセント位置の変種と考えるとよい。

短母音 [i], [e], [y], [ø], [u], [o] は調音的にはそれぞれ対応する長母音 (例えば, [i] は [i:] よりも舌の位置が低く、口の開きがやや大きいので、前者を短閉母音、後者を長閉母音と呼んでいる。また、調音の際の緊張感の相違から短閉母音と長閉母音は「ゆるみ (ungespannt)」と「張り (gespannt)」の対立としてもとらえられる。

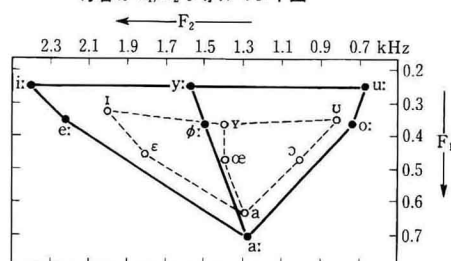
表1 ドイツ語の母音

舌	前	後	前	舌	中	舌	奥	舌
高低	唇の形		前	舌	中	舌	奥	舌
	開口度		非円唇	円唇	非円唇	円唇	非円唇	円唇
高	狭	閉	i: i	y: y			u: u	
		開	ɪ	ʏ			ʊ	
中高	半狭	閉	e: e	ø: ø			o: o	
		開	ɛ: ɛ	œ	ə		ɔ	
中低	半広							
低	広				a	a:		

図2は Arsen Rausch の資料に基づいて Hans Walter Wodarz & Klara Wodarz-Magdics* が作製した標準ドイツ語の母音の F_1/F_2 フォルマント図で、長母音を●印、短母音を○印で示し、それぞれ実線と破線で結んである。図から明らかなように、短母音は図の中央に寄っている。これは各短母音の音色が対応する長母音のそれよりも、中舌音に近づくことを示している。(*Phonetica 24, 1971)

長閉母音は閉音節にも閉音節にもあらわれるが、短閉母音は主として閉音節にあらわれ、その際、後続の子音と密接な結び付き (fester Anschluß) を示す。

低舌母音についても、これを前寄りの調音の [a] と奥寄りの調音の [ɑ], [ɔ] に分類することもあるが、これらの質的な相違は他の母音の対に見られるほど顕著ではない。

図2 Wodarz & Wodarz-Magdics によるドイツ語の母音の F_1/F_2 フォルマント図

で、本書では [a], [æ] と表記し、量によってのみ区別している。[e] は唯一の長開母音である。

そのほかに、本書では [ə] を除く語尾の非アクセント位置の母音に半長音符 [ː] をつけている (→3-8)。

次に表1の分類に従って、各母音とその例語を示す。

3-1 非円唇前舌母音

舌は前上方硬口蓋の方向に持ち上げられ、唇は横に開かれる。[iː], [eː] の舌の位置はそれぞれだいたい Daniel Jones (1881-1967)* の基本母音 [i], [e] に相当する。[eː], [e] のそれは基本母音 [e] よりやや高いと言われる。(* *An Outline of English Phonetics* 1960)

[iː] 口の開きは最も小さく、唇は横に張り、舌は硬口蓋に最も接近している: *ihr* [iːr], *bieten* [biːtən], *Vieh* [fiː]

[i], [iː] *Ideal* [ideá:l], *Pilot* [pilót], *Pulli* [póliː]

[i] 舌の前上方への高まりは [iː] ほどではない。唇は横に開くが、その緊張はゆるんでいる。音色は [iː] よりも [eː] に近い: *irre* [íra], *bitten* [bítən]

[eː] 唇は横に張っている。口を開きすぎて [eː] にならないよう注意を要する: *Ehre* [é:ra], *beten* [bé:tən], *Tee* [teː]

[e], [eː] [i] と同様、非アクセント位置の開音節に多い: *egal* [egá:l], *lebendig* [lebéndɪç], *Aloe* [á:loe]

[e] [eː] に対応するゆるみ母音。舌は [i] よりも口の開きがいかに大きい。音色は日本語の「エ」に似ている: *Erbe* [érba], *betten* [bé:tən]

[eː] *Uvulae* [ú:vuleː]

[eː] *Ähre* [é:ra], *báten* [bé:tən], *jäh* [jeː]

3-2 円唇奥舌母音

舌は奥上方ないし後方に持ち上げられ、唇は円められる。[uː], [oː], [ɔ] の舌の位置はそれぞれ基本母音 [u], [o], [ɔ] とだいたい一致する。

[uː] 舌は奥上方、軟口蓋の方へ持ち上げられる。口の開きは最小、唇の円めも最も強い。その点で日本語の「ウ」とは異なる: *Uhr* [uːr], *Bude* [bú:de], *Kuh* [kuː]

[u], [uː] *Uran* [urá:n], *Musik* [muzí:k], *Kakadu* [kákadu]

[u] [uː] に対応するゆるみ母音。舌は [uː] ほど高くないが、より奥である。口の開きも [uː] より大: *Urteil* [úr-tail], *Butter* [bú:taɐ]

[oː] 舌は奥上方、咽頭壁の方向に強く高められる。唇の円めは強い: *Ohr* [oːr], *Bote* [bó:ta], *roh* [roː]

[o], [oː] *oral* [orá:l], *potent* [potént], *desto* [déstó]

[ɔ] [oː] に対応するゆるみ母音。奥舌母音中で奥舌面が咽頭壁に最も近づく。口の開きも最大: *Ort* [ɔrt], *Motte* [móta]

3-3 円唇前舌母音

舌の位置は対応する非円唇前舌母音とだいたい同じで硬口蓋の方向に高められるが、円唇奥舌母音と同様に唇が円められて突き出される。このため対応する非円唇前舌母音よりも F₂, F₃ の周波数値がかなり低い。

[yː] 舌の位置は [iː], 口の開きと唇の形は [uː] に類似: *über* [ý:bər], *Büdnar* [bý:dnər], *früh* [fryː]

[y], [yː] *Büro* [byró:l], *Groszy* [gróʃy]

[ɨ] 舌の位置は [i], 口の開きと唇の形は [u] に類似: *Ypsilon* [ýpsilon], *Bütta* [bíta]

[øː] 舌の位置は [eː], 口の開きと唇の形は [oː] に類似: *Öhr* [øːr], *Böden* [bø:dn], *Bö* [bøː]

[ø], [øː] *Ökologie* [økológiː], *möbliert* [møbliért], *Malmö* [málmgø]

[œ] 舌の位置は [e], 口の開きと唇の形は [ɔ] に類似: *Örtchen* [é:rtçən], *Götter* [gó:ttər]

3-4 低舌母音

標準語の [a], [æ] の舌の位置は基本母音の [a] と [ɑ] の

中間である。舌面は比較的平らなので平舌母音とも言われる。口の開きは中ないし大で唇に円めはない。音色は日本語の「ア」に近い。地方差はかなりある。

[aː] *artig* [á:rtɪç], *baden* [bá:dn], *nah* [naː]

[a] *Arm* [arm], *backen* [bá:kn]

[aː] *Thema* [té:ma]

3-5 中舌母音

3-5-1 あいまい母音 [ə] とその脱落

口は軽く開かれ唇や舌の形は静止状態に近い。非アクセント位置にのみあらわれる。

語末または子音の前の [əm], [ən], [əl] ではしばしば [ə] が脱落し [m], [n], [l] が音節主音 (→5. 詳しい表記では [ɱ], [ɳ], [ɺ]) になる。また, [ə] の脱落によって破裂音と鼻音または側音の連音 (例えば [dn], [dl]) が生ずると、破裂音の破裂は鼻音の破裂 (口蓋帆が咽頭壁から離れる) や側音的破裂 (舌の側面のみ開く) になる。一方、鼻音の調音位置はしばしば先行の破裂音に同化される: *leben* [lé:bən] → [lé:bɱ] → [lé:bɳ], *Balken* [bá:kn] → [bá:knɱ] → [bá:kn]

本書では Duden² に従って、次に示す環境の [ə] を脱落しやすい [ə] としてイタリック体 [ə] で示す。

[əm] が摩擦音 [f, v, s, z, ʃ, ʒ, ç, x] または破裂音 [pf, ts, tʃ, dʒ] の後にあるとき: *kochem* [kóxəm]

[ən] が同上の摩擦音・破裂音または破裂音 [p, b, t, d, k, g] の後にあるとき。ただし、直前の音節に [..ən] がある場合と縮小辞 ..chen を除く: *fasten* [fástən]

[ə] が同上の摩擦音・破裂音・破裂音または鼻音 [m, n, ŋ] の後にあるとき: *Insel* [ínzəl]

[ə], [ə] *bekannt* [bəkánt], *bitten* [bí:tən], *bitte* [bí:ta]

語尾変化によって音声環境が変わると [ə] が脱落しなくなったり、逆に [ə] が脱落可能になる場合がある: *verschieden* [fərʃí:dən], ただし *verschiedenes* [fərʃí:dənəs]; *Sippe* [zípa], ただし *Sippen* [zípən]。本書では個々の語についてこれを示してはいないで、注意が必要である。

3-5-2 母音化 [ər] と [r]

次に示す音声環境で [ər] と [r] はしばしば母音化する。母音化 [ər], [r] は [ə] よりも舌の位置が低い中舌母音で、近年のドイツ語発音辞典ではしばしば [v], [ʁ] (または [ʁ]) で表記されている。[e] が単母音, [ɐ] が音節副音の母音であって、両者の質的な差はあまりない。本書では母音化しやすい [ər], [r] をイタリック体 [ər], [r] で示す。

[ər] 語尾または子音の前の er (まれに r): *bitter* [bí:tər], *öfters* [é:ftərs], *Bauer* [bá:uər], *Kentaur* [kəntá:uər] (ただし、子音の発音は [kəntá:ur])

[r] 長母音 [iː, eː, ei, uː, oː, yː, øː, aː] に続く語尾または子音の前の r。ただし, [aː] の後の [r] は母音化しにくいと言われている。両者の音質が似ているためかも知れない: *vor* [fó:r], *Pferd* [pfé:rt]

前つづり er..., her..., ver..., zer... の r: *herbel* [herbái], *zerackern* [tser|ákərn]

母音で始まる変化語尾がつくと語末の r は次音節の初頭音 (→5) となるから [ər], [r] は母音化しない: *besser* [bé:sər], ただし *bessere* [..sərə]; *Tür* [tyːr], ただし *Türe* [tyːrə]。本書では個々の語についてこれを表記していない。

3-6 二重母音 (Diphthong)

[ai], [au], [ɔy] の三種の二重母音がある。いずれも第一要素が音節主音、第二要素が音節副音を成す下降二重母音 (fallender Diphthong) である (→5)。ドイツ語の二重母音には英語の二重母音に見られるような第一要素の長音化はなく、第一要素も第二要素もほぼ同じ長さである。

[ai] *eitel* [áitəl], *leiten* [lá:ten], *Hai* [hai]